

# 新しい大学入試を突破する力を育てる 学力向上策の研究

## —時代が求める学力育成に向けた意識改革を目指して—

教科研究センター 高校教科研究課

木村 花栄 齋藤 正純 澤田 則義 中森 雅巳 山崎 秀樹

平成 28 年度に始まった「福井県到達度確認テスト」は今年 2 年目を迎え、現高校 2 年生について、昨年度（1 年次）との比較が可能になった。その経年比較の結果見えてきた課題は、基礎的な知識の不足と、論理的に考える力、持っている知識を場面に応じて使いこなす活用力の不足である。

また、全国的には高大接続システム改革が進み、平成 29 年 5 月に公表された「記述式問題例」、同年 7 月に公表された「マークシート式問題例」、さらに同年 11 月に実施された「大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）」からは、これから求められる力が、まさに「身に付けた知識・技能を、場面や条件に合わせていかに働かせ、表現するか」という点にあることがはっきり示された。

この二つを考えあわせてみると、平成 32 年度から実施される新しい大学入試に苦戦するであろう福井県高校生の姿が浮かび上がってくる。このような課題を乗り越えるためには、小学校・中学校・高校が連携して指導にあたること、これから求められる力を明確に意識して指導に当たることが必要である。

〈キーワード〉 高大接続 大学入試改革 大学入学共通テスト 到達度確認テスト

## I はじめに

「高校では、小・中学校の高い学力を十分に活かしきれていない」ことが、『福井県教育振興基本計画（平成 27 年～31 年度）』方針 2：夢や希望を実現する「突破力」を身に付ける教育の推進の〔基本的な考え方〕の中で、指摘されている。そこで、福井県下の県立高校普通科の生徒の学習到達度を測定し、その結果をもとに教員が授業改善を図ることで生徒の学力を向上させることを目指して、平成 28 年度から「福井県到達度確認テスト」が始まった。

問題および解答解説の作成や結果分析、報告書の作成は、教育総合研究所に兼務辞令を発令された学校の教員が行う。結果分析から得られた各教科の課題と、その解決の道筋を示す授業改善のポイントを具体的に考え、報告書に記載することで、県全体への周知をはかっている。

作問、分析にあたることは、教員が自分の学校やクラスを離れ、広い視野で生徒の状況をつかむきっかけになる。また、報告書に示される授業改善のポイントは、作問にあたる教員の実践と実感に基づくものであり、報告書を読む教員も、経験年数の長短にかかわらず安心して自分の授業に活かすことができる。

また、全国に目を向けると、急激かつ大きく社会が変わりつつある中で、学校教育その他で学習したことをもとに新たな価値を生み出すことができる人材の育成が急務となっている。そして、教育改革を進めるにあたり、改めて重視されているのが、①基礎的な知識・技能、②思考力・判断力・表現力等の能力、③主体性・多様性・協働性、の「学力の 3 要素」である。

「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」は、現行学習指導要領にも述べられ、これらの力をバランスよく効率的に育むことを達成するための「言語活動」が重視されてきた。平成 19 年度に導入された、小学校 6 年生、中学校 3 年生を対象とする「全国学力・学習状況調査」においては、「主として『知識』に関する問題」に加え、成果が上がってきていると評価されている。

翻って高校においては、「学力の3要素」を踏まえた指導が十分でないこと、その背景として、現在の大学入学者選抜が、知識の暗記と再生、解法パターンの習得と適用に偏っていること、さらに大学における教育の質の向上に向けた取組みがますます必要であることが、『高大接続システム改革会議「最終報告」』（平成28年3月31日）で指摘されている。

このような高校、大学における状況を背景に、「学力の3要素」をバランスよく育成し、能動的な学習の方法を身に付ける高校教育、多様な入学者の能力を明確な教育理念に基づいてさらに向上させる大学教育、高校教育および大学教育の本質的な改善を促すための大学入学者選抜を目指した改革が進められている。

平成28年3月には、各大学において「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）、「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）を策定し、公表することが学校教育法施行規則に改めて規定された。それにより、各大学が育成を目指す人材像やそのための具体的な教育活動が明確に示されたことになる。

本稿では、「福井県到達度確認テスト」の結果と「大学入学共通テスト」の動向をもとに、福井県の高校生が将来、よりよく夢を実現していくために何が必要なのかを考える。

## Ⅱ 「福井県到達度確認テスト」からみえる本県高校2年生の学力の現状

### 1 過去2年間の実施状況

本県では、平成28年度から県立高校普通科生徒を対象に、「福井県到達度確認テスト」（以下、県到達度テスト）を実施している。事業の目的は、生徒の学習到達度を測定し、定着が十分でない箇所を明確にし、効率的な学力向上のために活用できる情報を提供することにある。表1は、県到達度テストについて、対象学年や実施内容をまとめたものである。

表1

名称	受験対象	解答方式	実施時期	教科・科目
1年マーク	普通科高校 1年生全員	マークシート	H30 1月 H29 1月	国語、数学Ⅰ、英語
2年マーク 第1回	普通科高校 2年生全員	マークシート	H29 9月 H28 7月	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、英語
2年マーク 第2回	普通科高校 2年生全員	マークシート	H30 1月 H29 1月	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、数学Ⅱ、英語、 世界史B、日本史B、地理B、 物理基礎、化学基礎、生物基礎、物理、化学、生物
3年記述	普通科高校 3年生希望者	記述	H29 8月 H28 8月	文系：国語、数学（文系）、英語 理系：数学（理系）、英語、物理、化学

事業開始から2年が経過し、生徒が抱える課題について、年度を跨いで分析することが可能になった。2年間にわたって1年次、2年次とも同じ教科（国語、数学Ⅰ、英語）を受験した現高校2年生に着目し、平成28年度1年マーク（以下、1年マーク）と平成29年度2年マーク第1回（以下、2年マーク）の結果を比較し、3教科にみられる課題と、3教科に共通してみられる課題を考えてみたい。

### 2 各教科にみられる課題

#### (1) 国語

1年マークと2年マークの結果分析報告書において指摘された課題概要を表2にまとめた。

表2

実施テスト	第1問	第2問	第3問
	現代文（評論） 河合隼雄『イメージの心理学』	古典（古文） 一条兼良『ねさめの記』	古典（漢文） 小問集合 秦観『淮海集』

平成 28 年度 1 年マーク	課題① キーワードや対比構造に留意しながら、文章の主題と筆者の主張（何についてどう述べているか）について読み取るという、本文全体を俯瞰的に捉える力に課題がある。	課題② 傍線部前後の文脈から心情を考えるべき設問において、本文を通読して解いていないため、直前や傍線部までの事実しか捉えられていない点に課題がある。	課題③ B、C層（下位 70%）において、漢文句法の基礎知識の定着に課題がある。  課題④ 漢文の構造や漢字の意味を意識しながら、文章を読みすすめる点に課題がある。
平成 29 年度 2 年マーク 第 1 回	現代文（評論） 栗原彬『かんけりの政治学』	古典（古文） 作者不詳『落窪物語』	古典（漢文） 王弘撰『山志』
	課題① 意味を理解して本文を読み進めるための語彙力に課題がある。  課題② 語句の意味や指示語の内容を正確に捉えながら、筆者の論理展開を丁寧に読み取ることに課題がある。	課題③ 古典において、現代との価値観の違いや時代背景を意識した読解に課題がある。  課題⑤ B、C層（下位 70%）において、古典文法や漢文句法などの基礎知識の定着に課題がある。	課題④ 本文での例や引用された言葉を通して、本文の主題を読み取ることに課題がある。

1 年マークと 2 年マークの結果分析報告書における詳細分析も含めると、以下の 2 点が大きな課題であると考えられる。

- ・基礎知識の定着に課題がある。

現代文の語彙力の不足、古文における時代背景などの古典常識の不足、また漢文については句法が定着していない。

- ・内容を文章全体としてつかみ、論理展開を読み取ることに課題がある。

1 年マーク第 1 問（現代文）では、文章を俯瞰的に捉える力の不足、が挙げられ、2 年マーク第 1 問（現代文）でも、筆者の論理展開を丁寧に読み取ることに課題、と指摘がある。また結果分析報告書における詳しい分析によると、選択肢にみられる本文と合致するキーワードの有無だけで正誤判断がされている可能性が示唆されている。1 年マーク第 2 問（古文）でも、傍線の部分の直前など、一部だけを読んで解答していることが指摘され、文章全体を論理や事件の展開に沿って読むことができていないことがうかがえる。

## (2) 数学

1 年マークと 2 年マークの結果分析報告書において指摘された課題概要を表 3 にまとめた。ただし、1 年マークと 2 年マークでは出題分野が異なるため、ここでは、両テストで共通して出題された分野から分析を行う。

表 3

実施テスト	第 1 問	第 2 問	第 3 問
平成 28 年度 1 年マーク	数と式 （2 次方程式、平方根と式の値） 集合と命題 （命題、対偶、必要条件と十分条件）	2 次関数 （グラフと x 軸の位置関係、平行移動、区間における最小値、グラフと x 軸の共有点の関係）	図形と計量 （余弦定理、正弦定理、三角形の面積、円に内接する四角形の性質、三角形の相似比と面積比）
	課題① 式（対称式）の値を求めることに課題がある。	課題② 係数に文字を含む 2 次関数の平方完成に課題がある。	課題③ 正弦定理の扱い方に課題がある。

	第1問	第2問	第3問	第4問
平成29年度	2次関数	データの分析	図形の計量、平面図形	場合の数と確率
2年マーク 第1回	課題① 2次関数のグラフのy切片Yをaの関数で表し、最小値を求めることに課題がある。	課題④ 度数分布表から平均値をとり得る値の範囲を求めらることに課題がある。	課題⑤ 正弦定理で三角形の外接円の半径を求めることに課題がある。  課題⑥ 条件にあった図を的確に描き、考察することに課題がある。	課題⑦ 前問の考え方を利用して、選んでから並べる方法で場合の数と確率を求めることに課題がある。
	課題② 2次関数のグラフとx軸との交点の座標を求めることに課題がある。	課題③ 文字定数を係数にもつ2次関数のグラフの頂点の座標を求めることに課題がある。		

1年マークと2年マークの結果分析報告書における詳細分析も含めると、以下の2点が大きな課題と考えることができる。

- ・式変形の手順に対する理解に課題がある。

1年マーク第2問(2次関数)では、数値から文字係数に置き換わると平方完成の式変形ができなくなることが指摘されている。また2年マーク第1問(2次関数)では、文字定数を係数に持つ2次関数について頂点の座標を求めることに課題があることが指摘されている。これらは平方完成の手順やグラフの頂点についての基本的な考え方がしっかり理解できていないことが原因であると示唆されている。

- ・定理の理解と応用に課題がある。

1年マーク第3問(図形と計量)と2年マーク第3問(図形の計量)で、正弦定理に対する理解の不足が指摘されている。両テストとも正弦定理を用いて三角形の外接円について考える内容だが、外接円とは何か、正弦定理を用いて何を求めているかなど基本的な内容の定着が曖昧な点を取りあげられている。

### (3) 英語

1年マークと2年マークの結果分析報告書において指摘された課題概要を表4にまとめた。

**表4**

実施テスト	第1問	第2問	第3問	第4問
平成28年度	発音 アクセント	文法 語句整序	対話文—発言の趣旨	図表問題
1年マーク	課題① 発音・アクセント問題に課題がある。	課題② 学習した文法事項・語法に対する正しい知識の定着に課題がある。	課題③ 言外の意味を読み取る力、複雑な構造の英文を読み解く力に課題がある。	課題④ 図表から必要な情報を素早く読み取る力に課題がある。
平成29年度	発音 アクセント	文法 語句整序	対話文—発言の趣旨	図表問題
2年マーク 第1回	課題① 発音・アクセント問題に課題がある。	課題② 時制の正しい理解に課題がある。  課題③ 前置詞の適切な使い方に課題がある。	課題④ 英文の要点を正確に読み取る力に課題がある。  課題⑥ 未知語の意味を推測する力に課題がある。	課題⑤ 長めの説明文を正しく整理しながら読む力に課題がある。

1年マークと2年マークの結果分析報告書における詳細分析も含めると、以下の3点が大きな課題と考えることができる。

- ・正しい発音、アクセントの定着

1年マーク、2年マークとも第1問において、発音、アクセントに対する課題が指摘されている。特に日本語の中にカタカナ語として定着している語についての誤答が取りあげられている。

- ・文法・語法に対する知識と理解

1年マークおよび2年マーク第2問（語句整序）において、文法・語法の正しい知識や使い方への定着についての指摘がある。特に時制の正しい概念理解が曖昧であることが指摘されている。

・文章や情報を整理し、吟味する力

1年マーク第3問（対話文）と2年マーク第4問（図表問題）において、文章の構造理解や内容を整理する力の不足が指摘されている。また、内容の吟味が不十分なまま解答することが、誤答につながっている可能性があることも指摘されている。

### 3 3教科に共通する課題

3教科に共通してみられる課題は、まず、基礎知識の定着がうまくできていないように見えることである。知識・技能は学力の3要素の一つであり、これがなければ、思考力・判断力・表現力も働かない。国語における語彙力や漢文句法の知識、時代背景についての知識、数学における式変形の手順についての理解や、思考の土台となる定理の理解、英語における、発音やアクセント、文法に関する知識など、生徒が高校を卒業するまでに、何を、いつ、どの程度まで習得する必要があるのかを明確にすることが大切である。

また、問題の内容を整理し、論理の展開を押さえながら全体を正しく把握する力の不足、さらに、把握した内容を周辺知識と関連付けて吟味する力の不足を挙げることができる。このことは国語と英語において顕著であるが、数学における、式変形の手順に対する理解不足、定理の理解不足も、学習者が学習内容を整理して、内容を吟味することができていないことが原因と考えられる。

小・中学生を対象に実施している県学力調査の報告書『「SASA 2016 結果分析と指導改善（小学校・中学校）」においても、各教科に共通する課題として、同様の課題が指摘されている。一つは「複数の資料から、必要な情報を素早く読み取り、読み取ったことを関連づけて適切な文章で書き表すこと」、もう一つは「理由の説明や答えにいたる過程を、条件をふまえて論理的に自分の考えを記述すること」である。これらは、記述力の不足として語られているが、その前段階として、論理的に道筋をたどることができていないこととも関連があると思われる。

## III 求められる資質・能力の育成に向けた大学入試改革の概要

### 1 大学入試改革について

産業構造や就業構造の転換、生産年齢人口の急激な減少などにより、これからの社会を生き抜く子どもたちに求められる力が変化している。それは、「自ら課題を見出し、周囲と協力して解決していく力」である。この力を向上させる最終段階が大学教育であり、高校ではこの力の基礎部分をしっかり身につけて大学や社会へ子どもたちを送り出す必要がある。

学校で育てなければならない力が変化すれば、その測り方も変わる。つまり、「自ら課題を見出し、周囲と協力して解決していこうとする主体性があるかどうか」「見つけた課題について方策を考え、最適解を判断し、うまく表現することで他者と共有することができるかどうか」「課題に取り組むための知識や技能などの武器を持っているかどうか」を測ることがこれからの大学入試には求められる。

#### (1) 個別大学試験における、多面的・総合的評価の導入

それぞれの大学の入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する入学者選抜への改善が求められている。

##### ① 一般選抜でも、各大学の必要性に応じて様々な評価方法が課されるようになる。

具体的な評価方法としては、「大学入学共通テスト」の結果、各種大会や顕彰の記録、資格・検定試験の結果、活動報告書など大学入学までの活動の記録や大学入学希望理由書、エッセイや論述、面接や集団討論、プレゼンテーションなどが考えられる。

##### ② 学校推薦型選抜（推薦入試）、総合型選抜（AO入試）においても、学力評価が重視される。

これまで、学力の評価が十分に行われていないとされていた大学入学者選抜の改善として、学力テストなどによって高校での学習成果をより確実に把握し、活動報告書や面接の実施などによって大学教育に求

められる学力の水準に達しているかどうかを測ることが求められる。

- ③ 入試の形態にかかわらず、調査書や提出書類が改善され、重視される。

大学入学を希望する一人一人が積み上げてきた大学入学前の学習や多様な活動に関する評価の充実を図り、大学教育に生かすために、現行のような評定と修得単位数に偏った記載ではなく、学習評価の観点別評価の記載、生徒の特長や個性、多様な学習や活動の履歴を記載する欄を拡充するなどの改善が行われる。

- (2) 平成 32 年度から「大学入学共通テスト」実施

これまでの「大学入試センター試験」に代わり、平成 32 年度から「大学入学共通テスト」が実施されることが決まっている。その主な変更内容は次の 3 点である。

- ① 国語と数学で「記述式問題」を導入する。
- ② 英語は、「読む」「聞く」の 2 技能評価から「聞く」「読む」「話す」「書く」の 4 技能評価へ変更。
- ③ 「マーク式問題」についても思考力・判断力・表現力を測ることができるようにする。

## 2 入試動向説明会から見える求められる資質・能力

高大接続システム改革について、様々な研究会が開催されている。平成 29 年度は、以下にあげる大手予備校のセミナーやシンポジウムに参加し、高大接続改革の動向などに関する具体的な情報を収集した。

- (1) 「授業改革先取り対応セミナー（金沢）」 主催：株式会社ナガセ

平成 29 年 8 月 1 日（火）ANA クラウンプラザホテル金沢

- ① 文部科学省基調講演「高大接続改革の動向について」

文部科学省高等教育局高等教育企画課課長補佐 江戸朋子氏

社会の変化に対応するために、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三位一体の改革を行わなければならない。

高校生の学習時間の低下はあまり改善されていない。また、大学生の学習時間についても、諸外国と比較すると明らかに少ない。こうした現状を打開するためにも、学力の 3 要素を育成し、適切に評価するための大学入学者選抜改革を進めなければならない。

高校教育改革としては、平成 29 年度末の学習指導要領改訂に基づく教育課程の見直し、「学力の 3 要素」をバランスよく育成するための多面的な評価の推進、基礎学力の確実な習得と高校生の学習意欲の喚起のための「学びの基礎診断テスト」の導入を進めていく。

- ② 高等学校教育改革を行っている高校の実践

東京都三田国際学園中学校・高等学校 城野大輔教諭

授業改革の観点は、実践「アクティブ・ラーニング」、研修、評価の三つである。

自らの頭で考え、未知の問題を解決し、正解のない問いにチャレンジする生徒を育てる教育を目指している。つきたい力を見据えて知識を注入する授業、それを活用する授業、さらに評価する授業までを一体的に計画することが重要である。また、子どもたちを能動的にするために、教員にはファシリテーターであることが求められる。さらに、すべての教科の授業を同じテンプレートで実施することで、子どもたちの能力を効率よく伸ばすことができる。

教員間の考えを共有する研修、ICT スキルを上げる研修、教員がロールプレイングをする研修、教員が大学入試問題を解く研修、相互交流型の模擬授業を実施する研修などを行なって教員の質を高めている（新任 42 時間、現職 32 時間が必須）。教員研修の中で目指しているのは、暗黙知から形式知への転換を図ることだ。「職人に教えを請う」というスタイルでは、質の高い教員を育成し続けることができない。時間にも限りがある中で、暗黙知がマニュアルとして形式知化され、他の教員にも共有されていく。

全員がタブレットを持ち、授業で動画を見ながら、根拠の説明をグループワークでシェアする。その後、タブレットを用いて個人で発表し、評価する。

我々の仕事は、生徒の見えない学力をいかに可視化して評価するかがポイントである。パフォーマンスまでの道のりで評価する。

(2) 「高大接続改革シンポジウム（神戸）」 主催：河合塾

平成 29 年 8 月 29 日（火）神戸三宮現役館

① 文部科学省基調講演「高大接続改革の動向について」

内容は、(1)の①に同じ

② 高大接続改革・大学教育改革を行っている大学の取り組み（京都大学）の紹介

京都大学理事・副学長 北野正雄教授

現行入試制度の問題点として、次のことがあげられる。一つは、偏差値重視への偏向により大学・学部が序列化され、偏差値による輪切りが存在すること、もう一つは、様々な意味で入学者の多様性が喪失していることである。

大学入学者選抜の課題としては、入学する学生と学部・学科とのミス・マッチが助長されていることが上げられる。

以上の問題点や課題を解決するためには、大学を選ぶ生徒がきちんと大学の中身を知り、その上で大学を選び、大学も生徒の適性を適正に測って、入学者を選抜する形を作ることである。ただし、現在の高大接続システム改革の議論は、制度や方法に過度の力点が置かれ、教育改善の観点が置き去りにになっていることが問題だ。教育のあり方を検証、改善し、社会全体として次世代の教育をどうすべきかを検討し、教育環境の整備充実を図るべきである。

京都大学が 2 年前から実施している「特色入試」は、「学びのニューソース（新資源）」である。学びの内容が選抜を通じて発信される形になっている。それは、一般入試の受験生に対しても波及効果がある。

(3) まとめ

(1)、(2)への参加を通じ、これからの指導に必要なと思われることをまとめる。

- ・筋肉増強のためには、筋肉トレーニングが欠かせないように、思考力・判断力・表現力をつけるためには、これらの力を実際に稼働させる学習の場が必要である。現行の学習指導要領においても、各教科とも言語活動を通して指導事項について指導するという枠組みが示されてきたが、今後一層の充実が必要である。
- ・言語活動を効果的なものにするための教員のスキル向上も欠かせない。とくに、授業を知的創造活動の場にするために教員がファシリテーターとしての役割を果たすことが必要である。
- ・教科間の連携をはかり、学校で過ごす全ての時間を能力を伸ばすトレーニングの時間にすることが必要である。
- ・つきたい力と測りたい力を一致させた評価方法を取り入れて行くことが必要である。

**3 「大学入学共通テスト」モデル問題から見える求められる資質・能力**

高大接続システム改革の一部として、現行の大学入試センター試験に代わり、平成 32 年度から「大学入学共通テスト」を導入することが決まっている。知識・技能の評価に加え、思考力・判断力・表現力の評価を中心に行うことで、高校段階における基礎的な学習の達成度を判定し、大学教育に必要な能力を把握することを目的とする。特に注目を集めているのは、まず、国語と数学で「記述式問題」を導入すること、次に英語は、「読む」「聞く」の 2 技能から「聞く」「読む」「話す」「書く」の 4 技能評価へ変更すること、さらに、「マーク式問題」についても思考力・判断力・表現力を測ることができるようにすることの三つである。

平成 29 年度における「大学入学共通テスト」導入に向けての動きは次のとおりである。

平成 29 年 5 月 記述式問題モデル例（国語 2 題・数学 2 題）の公表（独立行政法人大学入試センター）

7 月 「大学入学共通テスト実施方針策定に当たっての考え方」（文部科学省）

マークシート式問題モデル例（国語 2 題・数学 2 題）の公表

11 月 「試行調査（プレテスト）」（国語、数学、地歴・公民、理科）実施

平成 30 年 2 月 「試行調査（プレテスト）」（英語）実施

(1) モデル問題例（平成 29 年 5 月 16 日公表）について

「大学入学共通テスト」記述式問題のモデル問題例（国語2題、数学2題）が平成29年5月16日に公表された。この記述式問題で評価しようとしている資質・能力は「解答させる内容と資質・能力、出題形式との関係について」に整理されている。以下、各教科が求める資質・能力と、今後必要となる指導をまとめる。〔○評価しようとしている資質・能力 ◎今後必要となる指導〕

【国語】

○「考えの形成」の資質・能力を中心に評価しようとしている。テキストに書かれていることを把握した上で、テキスト全体から精査・解釈し、それに基づき考えを形成する。複数、他種類のテキストを比較したり、統合したりする力や、妥当性を吟味して、情報を統合・構造化する力、目的に応じて考えを形成して論じる力などが求められている。

◎これまで出題されてきた評論文や小説に加え、「論理的な内容を題材にした説明、論説」「会議録、実務的な文章、法令の条文や公文書」「図表・グラフなどの統計資料」を実際に読み取る場を設けること。複数のテキストを比較したり、関連づけたりして考えをまとめ、表現する機会を設けること。

【数学】

○焦点化した問題を解決することと数学を活用した問題解決に向けて、構想見通しを立てることを評価しようとしている。特に目的に応じて式やグラフなどを活用したり、数学的な考え方をもとに処理したりする力、また、考察の結果を基に、問題解決の方法を数学的に説明する方法を求める力が求められた。

◎複数の立場を比較したり、新しい情報と統合して内容を読み取ったりして考え方を展開させたりする学習活動。

4 「大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）」から見える求められる資質・能力

「大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）」では、全体を通して、単純に知識を問う問題ではなく、知識を活用して考察する過程を問う出題が見受けられた。

言語活動や探究活動など、高校における授業や学習場面を設定した問題が出されている。また、複数の資料やテキストから、必要な情報を抽出し組み合わせるなどして、思考力・判断力を問うものになっている。

以下、各教科出題の特徴と、今後必要となる指導をまとめる。〔○出題の特徴 ◎今後必要となる指導〕

(1) 国語

○複数の、種類の異なるテキストを読み、新しい情報を関連づけて解釈したり、テキスト全体を把握した上で、条件に合わせて考えを述べたりする問題が出題されている。

◎複数のテキストを比較しながら読み、比較したり、関連づけたりして、考えをまとめて表現する機会を設ける必要がある。

(2) 数学

○従来と比べて読む分量が大幅に増加している上に、長い文章から必要な情報を取捨選択しながら解答させる問題が増えた。

◎有用な情報をまとめる読解力とともに、的確に数学的情報を処理する力が必要である。

(3) 地理歴史

〈日本史〉

○知識によらなくても、視覚資料の読み取りによって解答できる問題が、センター試験よりも増えた。ただし、情報量が多い上に、単純な知識では解けないため、解答に時間がかかる。

資料から得た情報と知識を活用し、歴史的事象の意味や意義、因果関係を理解しているかが求められる。

◎資料・グラフ・図版などを主体的に活用して、課題を設定し、対話的な活動を取り入れる必要がある。

〈世界史〉

○歴史史料・系図等の資料やグラフ、写真・絵画等の図版を使用した読み取り問題が激増した。知識を活用した上で判断することが必要なため、センター試験よりも多くの時間がかかる。



◎基礎的な歴史的知識を身につけることは疎かにせず、歴史的事項の探究を行う必要がある。

(地理)

○「大学入試センター試験」同様、地図、グラフ、地形図、写真、統計表、模式図などを多く利用した資料利用問題が大半を占める。

◎複数のテキストや資料を提示し、必要な情報を組み合わせて思考・判断する力が必要である。

(4) 公民

(現代社会)

○センター試験形式のリード文がなくなり、読解が必要な対話文や資料が多数出題された。解答するにあたり、ほとんどすべての文章を読み、様々な立場から考察することが求められた。

◎ある事象の原因や解釈の説明として、正しいものをすべて選ぶ、あるいは、誤っているものを一つだけ選ぶといった問題形式がある。事象について考える際に、多角的・多面的に考察する力が必要である。

(5) 理科

(物理)

○複数の正解がある問題や、誤差を少なくするために行う実験操作の意味を考えなければならない問題が出題されていた。

◎実験計画の立案から生徒に考えさせ、生徒が科学の方法を正しく身につける必要がある。

(化学)

○全体的にリード文が長文化し、実験の操作過程や、そこから得られる結果や考察を問う出題がある。

◎読解力の育成、および実験自体や操作の目的、実験計画の立案にかかる学習の充実が必要である。

(生物)

○実験方法を考える問題や、実験・観察の過程で行う操作の目的などを考えさせる問題が出題されていた。

◎実験や観察について、操作目的や実験方法の論理的な考察、結果の考察などの活動を行う必要がある。

(地学)

○実験・観察の手順や方法、考察のしかたを問う出題がある。

◎実験・観察の機会を増やし、実感をともなった理解を促す必要がある。

## IV 求められる学力育成に向けた学力向上策

以上を踏まえ、福井県の高校生が新しい大学入試を乗り越えて自己実現を図っていくために必要なこととして、小学校・中学校・高校の12年間を通した連携、教科の枠を越えた視点を持つこと、言語活動のさらなる充実、の三つをあげたい。

### 1 小学校・中学校・高校、12年間を通した連携

IIの3でも述べたように、福井県の高校生が抱えている課題は、小学生・中学生が抱えている課題でもあり、また、教科の枠を越えた課題でもある。しかし、高校の3年間でできることには限りがある。従って、この課題を解決するためには、小学校・中学校・高校それぞれにおいて12年間を見通した指導にあたること が是非必要である。

12年間を見通す、ということは、それぞれの教科で養うべき知識、技能、考え方について、いつ、何を、どこまで身につけるかを体系づけることである。自分が教えていることが、学習段階のどの位置に相当し、どのような学習内容を引き継いでいるのか、そして、どこにつながっていくのかを意識することで、子どもが今、何をできなければならないかが明確になる。

### 2 教科の枠を越えた視点を持つ

まず「カリキュラム・マネジメント」も含めて、学校内における横の連携＝教科間の連携が必要である。

例えば、東京都三田国際学園中学校・高等学校では、すべての教科が同じテンプレート（知識の獲得→解決方法の模索→仮説立案→仮説に沿った活動）に則って授業を実施することで子どもたちの能力を効率良く

伸ばしている。加えて教員間の考えを共有する研修や相互交流型の模擬授業を実施する研修などを必須とし、教員が持つスキルを共有できるような仕組みも出来上がっている。このような方策を実施していくための調整力が今後、各学校に求められる。

また、教科の枠を越えて、議論することや文章に書き表すことなど言語技術を身に付けさせることも重要である。クラスメイトと議論し、考えたことを文章化する、という過程を繰り返すことが思考力・判断力・表現力を向上させる。「大学入学共通テスト」の試行調査においても、対話や図表などテキストの多様化、処理すべき情報量の増加が指摘されているが、情報処理能力の向上はもちろん、今後は、生徒がいかにかに自らの考えを形成し、適切に表現していくか、という言語技術を身に付けさせなければならない。

### 3 言語活動のさらなる充実

言語活動については、現行の学習指導要領において、各教科の指導事項は言語活動を通して指導することが謳われているが、その指導が十分でないことが高大接続システム改革会議「最終報告」で指摘されている。また、「大学入学共通テスト」試行調査においては、現行の「大学入試センター試験」に比べ、言語活動を意識した問題作成がされていることが特徴としてある。その点においても、今後ますます言語活動の充実が求められることが予想される。

また、県到達度確認テストの2年間の結果から、キーワードの有無だけで、正解を導こうとしていたり、問題を解くための土台となる定理の理解が不十分であったりすることを指摘してきた。このことは、生徒の学習が表面的であること、つまり、自分自身が問題を理解し、解決するという実際の活動が不足していることを示唆している。

もちろん、言語活動を充実させるためには幾らかの工夫が必要である。例えば、県内の高校では、実際に、次のような工夫がされている。

- ・ ICT を利用することで時間を有効に使い、言語活動の時間を確保。
- ・ ジグソー法などの手法を取り入れ生徒同士の情報共有を前提に授業。
- ・ 個人からペアあるいはグループ、さらにクラス全体というように段階的な活動を導入。

## V 終わりに～屋根を直すとしたら日が照っているうちに～

知識を伝えることはそうでもないが、「考える」ことを教えるのは、難しい。その難しいことをなんとなく遠ざけてしまい、日本の教育は長らく、「問題」に対する「正解」だけを求めることになったのではないか。もちろんそこには、「正確な知識の再生」が社会の中で求められてきたことが背景としてあるに違いない。ところが、今や身につけるべき知識がどんどん増える知識基盤社会であり、しかも知識だけでは解けない問題が山積している状態である。そこで「問題」と「正解あるいは最適解」との間の「プロセス」に焦点が当てられるようになったのである。

今、教育改革は「ヘアピンカーブ」に差し掛かっている。教師は、遠心力に飛ばされそうになりながらも、必死でこのカーブを曲がりきらなくてはならない。何しろ、未知の社会を生き延びることを課せられているのは、子どもたちなのだから。私たちには、子どもたちに「生き延びる」ための力をつける責任がある。

物事にはタイミングというものがある。教育改革は、今がギリギリのタイミングであるように思う。

「屋根を直すとしたら日が照っているうちに」。雨が降ってからでは遅すぎるのである。

#### 《参考文献》

- 文部科学省(2016)『高大接続システム改革会議「最終報告」』
- 福井県学力向上センター『平成28年度到達度確認テスト1年マーク分析報告書』
- 福井県学力向上センター『平成29年度到達度確認テスト2年マーク①分析報告書』
- 福井県学力向上センター『SASA2016 結果分析と指導改善(中学校)』
- 福井県学力向上センター『SASA2016 結果分析と指導改善(小学校)』
- 福井県教育研究所(2016)研究紀要 第121号